新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) - これまでとこれから -

岡部　信彦
川崎市健康安全研究所

発生から 3 年以上を経て、当初の「原因不明の肺炎」は、その疫学状況、病原、病態、臨床症状の把握、治療・予防法などについて、かつてないほどのスピードで進歩・進展したが、追い付いていないことも多々ある。一方、科学の進歩は、それにより新たな不明点がさらに浮き彫りになったり、速やかに検知できるようになった変異ウイルスの出現による状況の変化など、大きくダイナミックに動いている。新たに出現したウイルスは、病原性としてはエボラ出血熱や SARS などよりはるかに低いものであるが、一瞬の出来事として終わるのではなく、長期にわたって（歴史的には一瞬の出来事ともいえるが）多くの人を巻き込み、医療における感染症対策・保健衛生行政・人々の社会生活等における欠点を炙り出すようにして社会に浸み込んでいる。単なる感染症の予防と治療の問題だけではなく、政治、経済、国際社会の混沌を巻き込んだ「社会の病」となり複雑化し、著効が期待できるような「有効な処方箋」はいまだに乏しいが、一つ一つ解決していかなくてはならない。

新たな感染症の発生は往々にして行動半径が広い大人を中心にして流行が拡大する。新型コロナ感染症も、当初は小児での発生も少なく、重症化傾向は幸いにして今でも大人より低い。しかし、それ故に新型コロナ対策は大人を中心にして行われてきたことは否めない。

令和 5（2023）年 1 月 25 日開催の第 115 回アドバイザリーボードにおいて「これからの身近な感染対策を考えるにあたって」という提言を筆者を含む同会議の構成員らが行っているが、その中に「感染対策の合理性を考えるにあたっては、年代による特徴を考慮すべきである。ことに子どもにおいては、すこやかな発育・発達の妨げにならないような配慮が必要である。」との一文を入れている。

COVID-19 によるパンデミック状態が去った後、次なるパンデミック感染症が発生するか否か。正確な回答はないが、“risk としてのパンデミックに対して備える必要はある”と考えるのが正答である、と言えるであろう。COVID-19 は未知なことばかりの感染症ではなくなり、対応も変わってきた。感染症法上も、令和 5 年 5 月 8 日より 5 類感染症へ移行した。感染症対策だけではなく、医療・社会、そして小児の生活にも大きな影響を及ぼしたこの感染症のこれまでを振り返り、そしてこれからについて述べてみたい。

Presented by Medical*Online